

1 汚斑病

A 発生生態

- 1 葉のみに発生する。初めは淡黄色のしみ状の斑点を生じ、拡大して褐色・円形の病斑となる。病斑上にはすす状のカビを生じる。
- 2 8月～9月に降雨が多いと多発しやすい。生育中～後期に肥料切れを起こした場合に多発する傾向にある。
- 3 病原菌は、菌糸や胞子の形で被害植物について越冬し伝染源となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 発病の多いところでは耐病性品種を用いる。
- 2 たい肥などの有機物を十分施用して地力を保つ。
- 3 基肥には緩効性肥料を活用するとともに追肥にも留意し、肥料切れにならないようにする。

2 乾腐病

A 発生生態

- 1 いもに発生する。軽症の場合はいもの断面に赤色の小斑点が見られ、重症になると断面が一面に赤褐色となりスポンジ状に腐敗・空洞化する。重症の場合は地上部にも葉脈間の萎れ等がみられる。
- 2 種いもとして親いもを用いると伝染の危険性が最も高く、次いで子いも、孫いも、ひ孫いもと低くなる。
- 3 土壌及び種いもにより伝染する。病原菌は、り病いもの残さとともに土中に残り、また土壌中における生存期間が長く、4～5年後に作付しても発病することがある。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 健全いもを使用するが、できれば孫いもを用いる。
- 2 輪作は必ずしも有効ではないが、サトイモを休閑する期間はできるだけ長くする。
- 3 り病いもはできるだけ除去し、ほ場に残さない。

3 黒斑病

A 発生生態

- 1 いもの表面に灰白色の菌叢が広がり、進行すると中央が黒色に腐敗してくぼんだ病斑を生じる。
- 2 収穫期の脱球傷や、収穫時の傷、線虫による傷が病原菌の主とした侵入経路である。最適発病条件は25～27℃、湿度100%であり、夏場の高温多湿時に収穫したものは発病しやすい。
- 3 主として種いもにより伝染する。また病原菌は、り病いもなどとともに土壌中に残り、土壌伝染する可能性もある。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 発病は場からは種いもをとらない。
- 2 無病いもを選ぶ。
- 3 発病した催芽床の土は翌年使用しない。
- 4 掘り取り時及び選別時にいもを傷つけないようにする。

4 疫病

A 発生生態

- 1 病徴は葉や葉柄、いもに見られる。葉での症状は、はじめ円形～楕円形の黄褐色の斑点ができる。斑点が多くなると、褐色の同心輪紋のある大病斑となる。病斑は破れやすい。ひどくなると葉柄が褐色、黄変し、葉は枯死する。
- 2 春から秋に発生し、特に、比較的低温で多湿の時に発生しやすい。雨天が多いとまん延する。
- 3 被害植物の組織中の菌糸や卵胞子が、翌年の伝染源になる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 健全な種いもを用いるとともに、収穫後は被害残さの処分を行う。
- 2 排水対策やほ場の衛生管理を行う。

5 軟腐病

A 発生生態

- 1 主に葉や葉柄に発生するが、いもにも発生することがある。葉は黄変して巻き上がり生育が劣る。葉柄は地際部が水浸状となり、次第に上方に広がって軟化腐敗し倒伏する。いもでは萌芽部付近から発病し、軟化腐敗する。
- 2 病原細菌は、アブラナ科植物の軟腐病と同一で土壌伝染が主であるが、種いもによっても伝染する。
- 3 土壌の過湿が本病発生の誘因となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 過度のかん水を避ける。
- 2 多発地でのマルチ栽培は透明プラスチックマルチを避け、黒色プラスチックマルチを用いる。
- 3 窒素質肥料の多用を避ける。
- 4 被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。

6 ウイルス病

A 発生生態

病原ウイルスは、キュウリモザイクウイルス（CMV）及びサトイモモザイクウイルス（DsMV）が知られている。CMVはアブラムシにより伝搬され、種いもによる伝染の可能性は少ない。一方、DsMVはアブラムシによって伝搬されるほか、種いもによっても伝染する。

B 化学薬剤以外の防除方法

1 CMV

- 1) プラスチックシルバーフィルム等によるマルチ栽培を行う。
- 2) 多発地では石川早生など発病の少ない品種を栽培する。
- 3) ほ場周辺の雑草はアブラムシの発生源となるので、できる限り除草する。

2 DsMV

種いもの更新を行う。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫の防除（虫害アブラムシの項を参照）

7 ハダニ類（カンザワハダニ）

A 発生生態

- 1 主にカンザワハダニが発生する。
- 2 梅雨が明けてから急激に増加し、8月中、下旬にピークがみられ、9月下旬を過ぎると減少する。
- 3 増殖が著しく早く、夏季の高温時には、10日間ほどで卵から成虫になる。

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場周辺の雑草が発生源になるので、周辺雑草を除去する。

C 薬剤防除のポイント

葉にわずかでもカスリ状の退色部がみられたら防除する。

8 アブラムシ類 (ワタアブラムシ)

A 発生生態

- 1 主にワタアブラムシが発生し、CMV、DsMVを伝搬する。
- 2 生育中～後期の6～9月にかけて葉裏、新芽などに群生し加害する。

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場周辺の雑草が発生源になるので、周辺雑草を除去する。

9 ハスモンヨトウ

A 発生生態

- 1 夏季が高温乾燥に経過する年は早くから発生する。
- 2 老熟幼虫になると、日中は物かげにかくれて夜間に食害する。また、老熟幼虫に対しては薬剤の効果が効きにくくなる。

B 化学薬剤以外の防除方法

卵塊や分散前の若齢幼虫を除去する。

C 薬剤防除のポイント

老熟幼虫に対しては薬剤の効果が劣るため病虫害防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) に掲載されるトラップデータ等の情報に留意して早期発見、適期防除に努める。

ハスモンヨトウの幼虫



ホームページを
チェックだモン！



©2010 熊本県くまモン